

親から学んだこと

子どものころ、父親からこんな話を聞きました。

「人間が死んだらな、まずえんま様という鬼のような恐ろしい顔をした大王のところへ連れていかれるんや。そこでえんま様がその人が生きていた間に悪いことをせんだか聞くんや。死んだ人間がうそこくと、鏡の前へ連れていかれるんや。この鏡は人間の一生を早送り映し出す鏡で、生きとった時に悪いことをしている姿もえんま様には全部見えるんや。そんで、うそこいた人間は舌をペンチで抜かれて地獄へ送られるんや。いてえぞお。正直に言ったもんは極楽へ行くんや。うそこいたらだちゃかんぞ。」

子ども心に真剣に地獄へだけは生きたくないと思いました。

母親からはこんな話を聞きました。

「地獄も極楽も食べるものはみんな同じなんやと。しゃば(生きてる世界)とちごうがは箸^{はし}の長さが3尺(90cm)もあるげと。そうしたら、地獄のもんは箸が長すぎて隣の人がじゃまになってなかなか思うように喰われんで毎日おおげんかになるげと。そやけど極楽のもんは長い箸使うて仲良く向いの人に食べさせるげと。」



子ども心に地獄はいやだけど、極楽も結構気をつかうところやなあと思っていました。

わが家は昔から総持寺との関係が強く、親の話に地獄極楽がよく出てきました。現代っ子にこんな話は通用しないのは十分承知しています。しかし、時代は変わっても人間として不変の価値が必ずあるはずです。それはきっと読書で得ることもできます。友人と交わることによっても育まれます。もちろん学校教育の道徳でも学習しています。ぜひともそれに加えて家庭教育の中で自分(親)が培ってきた道徳心、道徳観をもう一度振り返って子に聞かせることがわが子の生きた道徳観を育むことになろうかと思えます。

〈注釈〉 うそこく…うそをつく

だちゃかん…いけない (昭和30年代まで使われた方言です)